

会議・視察報告

極東国立交通大学主催の国際フォーラムに参加して

ERINA 調査研究部長・主任研究員
新井洋史

2017年10月25日から28日にかけて、ロシア・ハバロフスク市にある極東国立交通大学において同校の創立80周年を記念する様々な行事が行われた。全体を通しての行事の名称は、「交通フォーラム『極東：交通・発展哲学』」である。このコーナーでは通常、参加した会議の様相を紹介するが、今回は周年行事に参加したことでもあり、大学自体の紹介を中心に小稿をまとめた。

まず、この大学の名称に注意を促しておきたい。本稿では「極東国立交通大学」と表記するが、これは大学名の公式英訳である Far Eastern State Transport University を和訳したものである。このうち、交通=Transportに相当する部分のロシア語は Пути сообщений であり、直訳すると「連絡路」といった意味であるが、ロシア国内では通常は「鉄道」の意味で用いられる。(ロシア語には、これとは別に文字通り「鉄の道」という表現である Железная дорога という用語も存在する。)ソ連時代からロシア連邦初期には運輸部門を担当する役所として鉄道を所管する鉄道省とそれ以外の輸送手段を所管する運輸省が別々に存在したが、この「鉄道省」という日本語での呼称は、直訳すれば「連絡路省」となるところを所管業務の内容から判断して鉄道省と訳したものである。その例から言えば、この大学も、極東国立鉄道大学と訳すべきなのかもしれないが、大学自らが英訳にあたって Railway ではなく Transport を当てているので、本稿でも極東国立交通大学とする。

訳語はともかく、実態としては鉄道大学というべき存在である。そもその出発点

が、シベリア鉄道をはじめとして極東地域や東シベリア地域での鉄道建設、運行等に係る技術者、専門人材を養成する機関として設立されたところにある。1937年の設立時点の名称は「ハバロフスク鉄道技術者大学」と言った(この時点では、直接的に「鉄道」と呼称していた)。現在大学で教えているのも、鉄道車両や交通土木、電力供給、自動化・電気通信といった鉄道の建設、運行を支える工学系が主流である。ただし、近年は経済、経営、法律、心理学、観光など文系の学部、学科も充実してきており、単科大学から総合大学へと変容しつつある。工学系科目においても、鉄道に軸足を置いて研究、教育を行いつつも、それ以外の輸送手段へと幅を広げているとのことだ。こうした実情を踏まえ、大学名の英語表記では Transport を用いているものと理解している。

ロシアでも大学の国際交流が拡大する傾向にあり、極東国立交通大学も積極的に国際交流を進めている。HP上の情報によれば、世界各国の大学、研究機関等と合計62件の協力協定を締結しているとのことである。いくつかの大学との間では、単位の相互認定や複数学位の授与などの体制を整えている。2009年の「アジア太平洋諸国交通大学国際協会¹」の設立にあたっては、この大学が主導的な役割を果たしており、2011年～15年には会長大学も務めている。日本では、国立寒地土木研究所(札幌市)や国立長岡工業高等専門学校(長岡市)などとの交流を行っている。会議に参加していた長岡高専の青柳成俊先生の話では、ここ数年、夏期及び冬期に短期の学生派遣を行っている、教

育効果も高いとのことだった。例えば、毎年12月には当地で学生の技術力を競うコンテストがあり、長岡高専の学生も参加して好成績を収めているとのこと。実は、ちょうど本稿の準備中に新潟県の地元紙「新潟日報」が、ハバロフスクで開催された3Dプリンターを使った技術を競う学生コンテストで長岡高専の生徒が優勝したといううれしい記事を掲載していた。

一連の記念行事のうち、メインともいえる式典は10月26日の午前中に開催された。地元行政や鉄道関係機関の幹部、国内外の関係機関の代表者らが次々に祝辞を述べた。その中で印象に残ったのは、卒業生であり、ロシア連邦の初代鉄道大臣、さらには民営化後の初代ロシア鉄道社長を務めたゲンナージー・ファデーエフ氏である。割り当て時間を大幅に超過しても熱弁をふるう姿は年齢を感じさせず、また母校、そして鉄道に対する思い入れの強さを感じた。外国からの参加者も国別に順次登壇して祝辞を述べたが、その数は中国から8団体、日本が3団体、韓国が2団体で、中国の存在感が大きかった。日本の順番の際には、寒地土木研究所の鎌田照幸所長、長岡高専の竹茂求校長らとともに筆者もステージに上がり、お祝いを申し上げた。

翌27日の午前中には「アジア太平洋諸国の経済発展戦略における交通の役割」というテーマでのパネルディスカッションが行われた。モデレータは、同じくハバロフスクにあるロシア科学アカデミー極東支部経済研究所のパーベル・ミナキル会長であった。この場では、ロシア鉄道極東支局のゲンナージー・ネステルグ第一副支局長が、

¹ 本コーナーの別項も参照のこと。

国家的プロジェクトとして進められているシベリア鉄道・バム鉄道の近代化プロジェクトなど、最近の取組を説明した。また寒地土木研究所の鎌田所長は、北海道における冬期の道路維持（除雪等）に関連する研究やその実用化の状況などを紹介した。これらのテーマは、現実に極東国立交通大学との研究交流の対象となっているとのことだ。北京交通大学の邵春福教授は、中国の高速鉄道網整備のこれまでの進展状況や計画等について説明した。ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所のアンナ・バルダリ研究員は、ロシア極東地域と北東アジア諸国、特に中国との間での交通インフラ整備の進展状況等について発表した。筆者は、シベリアランドブリッジ（SLB）やチャイナランドブリッジ（CLB）といった、ユーラシア大陸をまたぐランドブリッジ輸送が、航空輸送と海上輸送の間の

ニッチに位置づけられるという考え方を披露した。

極東国立交通大学は、以前にも何回か

訪れているが、今回はお祝いということもあつてか、皆が明るく、温かく迎えてくれ、非常に好印象が残った。

挨拶するゲンナージー・ファデーエフ氏



（出所）筆者撮影